関数解析 I レポート

基礎工学研究科システム創成専攻修士 1 年
学籍番号 29C17095
百合川尚学
選択番号 [4][5][6][9][11][12][13]

2017 年 7 月 31 日

(約束及び定義)

- 係数体は複素数体 $\mathbb{C}$.
- 位相空間 X, Y に対し, $C(X,Y) = \{f \mid f$ は X から Y への連続写像 $\}$; $C(X) = C(X,\mathbb{C})$. $C_b(X) = \{f \in C(X) \mid f$ は有界 $\}$ は $\|u\| = \sup_{x\in X}|u(x)|$ をノルム (sup-norm) として Banach 空間である.
- s を複素数列全体のなす線形空間とする. $l^\infty = \{a = (a_n)_{n=1}^\infty \in s \mid \|a\|_{l^\infty} = \sup_n |a_n| < \infty\}$, $c_0 = \{a = (a_n)_{n=1}^\infty \in \mid \lim_{n\to\infty} a_n = 0\}$. このとき l^∞ は $\|a\|_{l^\infty}$ をノルムとして Banach 空間である.

[4]. $k \in \mathbb{N}_0$, $I = [a,b]$ とする. $C^k(I)$ は $|f|_k = \sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}\left|f^{(j)}(x)\right|$ をノルムとして Banach 空間であることを示せ.

証明. 以下の手順で示す.

(i) $|\cdot|_k$ が $C^k(I)$ におけるノルムである.

(ii) $C^k(I)$ の $|\cdot|_k$ による Cauchy 列を取ると, 各 $j\,(=0,1,2,\cdots,k)$ 階導関数列に対し或る I 上の連続関数 f^j が存在し, j 階導関数列は f^j に I 上で一様収束する.

(iii) 各 $j = 0,1,2,\cdots,k-1$, について f^j は I 上連続微分可能で $f^{j+1}(x) = \frac{d}{dx}f^j(x)\ (\forall x \in I)$ が成り立っている.

(i) $f, g \in C^k(I)$ と $\alpha \in \mathbb{C}$ を任意に取る. 正値性 $|f|_k \geq 0$ は右辺の各項が ≥ 0 であることから成り立つ. また $|f|_k = 0$ の場合, 右辺で $\sup_{x\in I}|f^{(j)}(x)| = 0\ (j = 0,1,2,\cdots,k)$ が成り立ち, 特に f は I 上で零写像であるとわかるから $f = 0$ である. 逆に f が I 上で零写像ならば全ての導関数が零写像になるため右辺は 0 になり, 従って $|f|_k = 0$ となる. 同次性は

$$|\alpha f|_k = \sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}\left|\left(\alpha f^{(j)}\right)(x)\right| = \sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}\left|\alpha f^{(j)}(x)\right| = \sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}|\alpha|\left|f^{(j)}(x)\right| = |\alpha|\sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}\left|f^{(j)}(x)\right| = |\alpha||f|_k$$

により示される. 三角不等式は

$$\begin{aligned}
|f+g|_k &= \sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}\left|(f+g)^{(j)}(x)\right| \\
&= \sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}\left|\left(f^{(j)} + g^{(j)}\right)(x)\right| \\
&\leq \sum_{j=0}^k \sup_{x\in I}\left|f^{(j)}(x) + g^{(j)}(x)\right| \\
&\leq \sum_{j=0}^k \left(\sup_{x\in I}\left|f^{(j)}(x)\right| + \sup_{x\in I}\left|g^{(j)}(x)\right|\right) = |f|_k + |g|_k
\end{aligned}$$

により示される.

(ii) $f_n \in C^k(I)\ (n = 1,2,3,\cdots)$ を $C^k(I)$ の $|\cdot|_k$ による Cauchy 列とする. 任意の $\epsilon > 0$ に対し或

る $N \in \mathbb{N}$ が存在して全ての $n, m > N$ で

$$\epsilon > |f_n - f_m|_k = \sum_{j=0}^{k} \sup_{x \in I} \left| f_n^{(j)}(x) - f_m^{(j)}(x) \right|$$

が成り立っているから，各 $j = 0, 1, 2, \cdots, k$ について $\left(f_n^{(j)}\right)_{n=1}^{+\infty}$ は sup-norm に関して Cauchy 列をなしている．$(C(I),\ \sup - \mathrm{norm})$ が Banach 空間であることが認められているから，各 $j = 0, 1, 2, \cdots, k$ についてそれぞれ或る I 上の連続関数 f^j が存在して，$\left(f_n^{(j)}\right)_{n=1}^{+\infty}$ は f^j に sup-norm で収束，即ち I 上で一様収束する．

(iii) 上で取った $(f_n)_{n=1}^{+\infty} \subset C^k(I)$ について，全ての $n \in \mathbb{N}$ と $j = 0, 1, 2, \cdots, k-1$ に対して次の関係が成り立っている．

$$f_n^{(j)}(x) - f_n^{(j)}(b) = \int_b^x f_n^{(j+1)}(t)\, dt, \quad (\forall x \in I).$$

ここで (ii) の結果から，任意の $x \in I$ と $\epsilon > 0$ に対し或る $N = N(j, \epsilon) \in \mathbb{N}$ が存在して全ての $n > N$ で

$$\left| f^j(x) - f_n^{(j)}(x) \right| < \frac{\epsilon}{3}, \quad \left| f_n^{(j+1)}(x) - f^{j+1}(x) \right| < \frac{\epsilon}{3(b-a)}$$

が成り立つようにできるから，同じ n について

$$\begin{aligned}
\left| \left(f^j(x) - f^j(b)\right) - \int_b^x f^{j+1}(t)\, dt \right| &= \left| \left(f^j(x) - f^j(b)\right) - \left(f_n^{(j)}(x) - f_n^{(j)}(b)\right) + \int_b^x f_n^{(j+1)}(t)\, dt - \int_b^x f^{j+1}(t)\, dt \right| \\
&\leq \left| f^j(x) - f_n^{(j)}(x) \right| + \left| f^j(b) - f_n^{(j)}(b) \right| + \int_b^x \left| f_n^{(j+1)}(t) - f^{j+1}(t) \right| dt \\
&< \frac{\epsilon}{3} + \frac{\epsilon}{3} + (b-a)\frac{\epsilon}{3(b-a)} = \epsilon
\end{aligned}$$

が成り立つ．ϵ は任意だから

$$f^j(x) - f^j(b) = \int_b^x f^{j+1}(t)\, dt, \quad (\forall x \in I,\ j = 0, 1, 2, \cdots, k-1)$$

が示されたことになる．右辺は連続関数 f^{j+1} の積分だから左辺 f^j は x に関して微分可能関数 (端点は片側微分を考える) となり，導関数は f^{j+1} である．ゆえに $f^0 \in C^k(I)$ が示される．表記を改めて $f := f^0,\ f^{(j)} := f^j\ (j = 1, 2, \cdots, k)$ と表せば，(ii) の結果より

$$|f_n - f|_k = \sum_{j=0}^{k} \sup_{x \in I} \left| f_n^{(j)}(x) - f^{(j)}(x) \right| \longrightarrow 0 \quad (n \to +\infty)$$

が成り立つことで $C^k(I)$ が $|\cdot|_k$ をノルムとして Banach 空間をなしていると示される． ∎

[5]. $X = C([0,1])$ を sup-norm の入った Banach 空間とする．$0 < a < 1$, $Y = \{f \in X\ ;\ [0,\ a]$ 上で $f(t) = 0\}$ とおく．

(1) Y が X の閉線形部分空間であることを示せ.

(2) X/Y と $C([0,\ a])$(sup-norm を入れる) は Banach 空間として同型であることを示せ.

証明.

(1) Y が X の線形部分空間であることは，任意の $f, g \in Y$ と任意の複素数 $\alpha \in \mathbb{C}$ に対して

$$(f+g)(t) = f(t) + g(t) = 0, \quad (\forall t \in [0,\ a])$$
$$(\alpha f)(t) = \alpha f(t) = 0, \quad (\forall t \in [0,\ a])$$

が成り立つことから示される．後は sup-norm に関して Y が閉集合となっていることを示せばよい．$f_n \in Y$ $(n = 1, 2, 3, \cdots)$ を sup-norm に関する Cauchy 列とする．$(C([0,\ 1]), \sup - \mathrm{norm})$ の完備性から $(f_n)_{n=1}^{\infty}$ は或る $f \in C([0,\ 1])$ に $[0,\ 1]$ 上で一様に収束するが，もし或る $x \in [0,\ a]$ について $|f(x)| > 0$ であるならば，この x において $f_n(x) = 0$ $(n = 1, 2, 3, \cdots)$ であることから

$$0 < |f(x)| = |f_n(x) - f(x)| \leq \sup_{t \in [0,\ 1]} |f_n(t) - f(t)|, \qquad (n = 1, 2, 3, \cdots)$$

となり $(f_n)_{n=1}^{\infty}$ が f に収束することに反する．従って f も $[0,\ a]$ 上で 0 でなくてはならず，f は Y に属することになる．これは Y が sup-norm の下で完備ノルム空間となっていることを主張し，以上より Y は X の閉線形部分空間であると示された．

(2) X の sup-norm を $\|\cdot\|$ で表現する．X を Y で割った商空間 X/Y の元を $[f]$ (代表元 $f \in X$) で表現して，Y が閉線形部分空間であるから X/Y は

$$\|\,[f]\,\|_{X/Y} := \inf_{g \in Y} \|\, f - g \,\|, \qquad ([f] \in X/Y)$$

をノルムとしてノルム空間となり，さらに $(X,\ \|\cdot\|)$ が Banach 空間であるから $(X/Y,\ \|\cdot\|_{X/Y})$ も Banach 空間となる．任意の $[f] \in X/Y$ について $f_1, f_2 \in [f]$ は $f_1 - f_2 \in Y$ を満たすから即ち

$$f_1(t) = f_2(t) \quad (\forall t \in [0,\ a])$$

が成り立っている．

$$\|\,[f]\,\|_{X/Y} = \inf_{g \in Y} \|\, f - g \,\| = \inf_{g \in Y} \sup_{t \in [0,\ 1]} |f(t) - g(t)| = \sup_{t \in [0,\ a]} |f(t)|$$

が成り立つことに注意する．

$$\sup_{t \in [0,\ a]} |f(t)| = \sup_{t \in [0,\ a]} |f(t) - g(t)| \leq \sup_{t \in [0,\ 1]} |f(t) - g(t)| \quad (\forall g \in Y)$$

$$\sup_{t \in [0,\ a]} |f(t)| \leq \inf_{g \in Y} \sup_{t \in [0,\ 1]} |f(t) - g(t)|$$

$[f]$ の元の定義域を $[0, a]$ に制限した関数は $C([0,\ a])$ の或る元に一致する．$C([0,\ a])$ の任意の元は定義域を $[0, 1]$ に拡張 (例えば $[a,\ 1]$ 上では適当な一次関数でおく) すれば $X = C([0,\ 1])$ の或る元に一致するから或る X/Y の或る元 (同値類) に属するしていることになる．写像 $X/Y \ni [f] \longmapsto f|_{[0,\ a]} \in C([0,\ a])$ は X/Y から $C([0,\ a])$ への全単射である．こ

の写像を T と表すとする．T は次の意味で等長である．$\|[f]\|_{X/Y} = \left\| f|_{[0,\ a]} \right\| = \|T[f]\|$．$T$ の線型性は

$$\begin{aligned}T([f]+[h]) &= T[f+h] = (f+h)|_{[0,\ a]} = f|_{[0,\ a]} + h|_{[0,\ a]} = T[f] + T[h],\\ T(\alpha[f]) &= T[\alpha f] = (\alpha f)|_{[0,\ a]} = \alpha f|_{[0,\ a]} = \alpha T[f]\end{aligned}$$

により示される．ゆえに T は $X/Y \longmapsto C([0,\ a])$ の同型写像であり，X/Y と $C([0,\ a])$ が Banach 空間として同型であることが示された． ∎

[6]. $I = [0,\ 1]$ とし，$X = C(I)$ を sup-norm の入った Banach 空間とする．$K \in C(I \times I)$ とし，$A = \sup_{(t,s)\in I\times I} |K(t,s)|$ とおく．$u \in X$ に対して $Tu : I \longmapsto \mathbb{C}$ を次で定める:

$$Tu(t) = \int_0^t K(t,s)u(s)\,ds,\ (t \in I).$$

(1) $u \in X$ ならば $Tu \in X$ を示せ．

(2) 写像 $X \ni u \longmapsto Tu \in X$ を同じ記号 T であらわすとき，$T \in B(X)$ 及び $\|T^n\| \leq A^n/n!\ (n \in \mathbb{N}_0)$ を示せ．

(3) $I - T$ は逆作用素を持ち，$(I-T)^{-1} \in B(X)$ であることを示せ．ただし I は X の高等写像である．

証明． X における sup-norm を $\|\cdot\|_X$ と表す．また $T^0 = I$(恒等写像) として考える．

(1) $u \in X$ に対して Tu が I 上で連続であることを示せばよい．任意の正数 $\epsilon > 0$ に対して $\delta = \epsilon/A\|u\|_X$ と取れば，$t \in [0,\ 1)$ と $t+h \in [0,\ 1] \cap (t, t+\delta)$ に対して

$$\begin{aligned}|Tu(t+h) - Tu(t)| &= \left| \int_0^{t+h} K(t,s)u(s)\,ds - \int_0^t K(t,s)u(s)\,ds \right|\\ &\leq \left| \int_t^{t+h} K(t,s)u(s)\,ds \right|\\ &\leq \int_t^{t+h} |K(t,s)||u(s)|\,ds\\ &\leq \int_t^{t+h} \sup_{(t,s)\in I\times I} |K(t,s)| \sup_{s\in I} |u(s)|\,ds\\ &\leq A\|u\|_X h < \epsilon\end{aligned}$$

が成り立つことにより Tu が $[0,\ 1)$ 上右連続であることが示される．同様にして Tu が $(0,\ 1]$ 上で左連続であることも示されるから，$Tu \in X$ が示される．

(2) (1) の結果より $X \ni u \longmapsto Tu \in X$ が判っているから，後は写像 $T : X \longmapsto X$ の線型性を示せば，T が X を定義域とする線型作用素であること，即ち $T \in B(X)$ が示される．T の線型性は，任意の $u, v \in X,\ \alpha \in \mathbb{C},\ t \in I$ に対して

$$\begin{aligned}T(u+v)(t) &= \int_0^t K(t,s)(u+v)(s)\,ds\\ &= \int_0^t K(t,s)(u(s)+v(s))\,ds\end{aligned}$$

$$
\begin{aligned}
&= \int_0^t K(t,s)u(s)\,ds + \int_0^t K(t,s)v(s)\,ds = Tu(t) + Tv(t),\\
T(\alpha u)(t) &= \int_0^t K(t,s)(\alpha u)(s)\,ds\\
&= \int_0^t K(t,s)(\alpha u(s))\,ds\\
&= \alpha \int_0^t K(t,s)u(s)\,ds = \alpha Tu(t)
\end{aligned}
$$

が成り立つことにより示される．次に $\|T^n\| \le A^n/n!$ $(n \in \mathbb{N}_0)$ を示すが，その準備に次のことを示す.

$$
|T^n u(t)| \le \frac{A^n}{n!}\|u\|_X\, t^n, \quad (t \in I,\ n = 1,2,3,\cdots). \tag{1}
$$

証明は数学的帰納法による．$n = 1$ のとき

$$
\begin{aligned}
|Tu(t)| &= \left|\int_0^t K(t,s)u(s)\,ds\right|\\
&\le \int_0^t |K(t,s)||u(s)|\,ds\\
&\le \int_0^t \sup_{(t,s)\in I\times I} |K(t,s)| \sup_{s\in I}|u(s)|\,ds\\
&\le A\|u\|_X \int_0^t ds\\
&= A\|u\|_X\, t
\end{aligned}
$$

が成り立つ．$n = k$ のとき (1) を仮定すると，

$$
\begin{aligned}
|T^{k+1}u(t)| = |T(T^k u)(t)| &= \left|\int_0^t K(t,s)T^k u(s)\,ds\right|\\
&\le \int_0^t |K(t,s)||T^k u(s)|\,ds\\
&\le \int_0^t \sup_{(t,s)\in I\times I} |K(t,s)| \frac{A^k}{k!}\|u\|_X\, s^k\,ds\\
&\le \frac{A^{k+1}}{(k+1)!}\|u\|_X\, t^{k+1}
\end{aligned}
$$

となることにより (1) が任意の $n \in \mathbb{N}$ で成立すると示された．従って $t \in I$ についての上限を取れば

$$
\|T^n u\|_X = \sup_{t\in I}|T^n u(t)| \le \sup_{t\in I}\frac{A^n}{n!}\|u\|_X\, t^n = \frac{A^n}{n!}\|u\|_X, \quad (\forall u \in X,\ n = 1,2,3,\cdots)
$$

となる．$n = 0$ の場合は，$\|Iu\|_X = \|u\|_X$ $(\forall u \in X)$ により $\left\|T^0\right\| = \|I\| = 1$ である．以上より $\|T^n\| \le A^n/n!$ $(n \in \mathbb{N}_0)$ となることが示された.

(3) $(X, \|\cdot\|_X)$ が Banach 空間であるから $B(X)$ も作用素ノルムの下で Banach 空間となっている．従って級数

$$
\sum_{n=0}^{+\infty} T^n \tag{2}
$$

が収束することの十分条件は

$$\sum_{n=0}^{+\infty} \| T^n \| < +\infty$$

が成り立つことである．今，(2) の結果より

$$\sum_{n=0}^{+\infty} \| T^n \| \leq \sum_{n=0}^{+\infty} \frac{A^n}{n!} = e^A < +\infty$$

が成り立っているから (2) は収束する．つまり

$$T^* := \sum_{n=0}^{+\infty} T^n$$

と表せば T^* は $B(X)$ の元であり，部分和を $T_N := \sum_{n=0}^{N} T^n \ (N = 0, 1, 2, \cdots)$ と表現して $\| T_N - T^* \| \to 0 \ (N \to +\infty)$ が成り立っていることになる．任意の $u \in X$ に対して

$$\| (TT^* - TT_N)u \|_X = \| TT^*u - TT_N u \|_X = \| T(T^*u) - T(T_N u) \|_X = \| T(T^*u - T_N u) \|_X = \| T(T^* - T_N)u \|_X$$

と

$$\| (T^*T - T_N T)u \|_X = \| T^*Tu - T_N Tu \|_X = \| T^*(Tu) - T_N(Tu) \|_X = \| (T^* - T_N)Tu \|_X$$

が成り立つことから，

$$\| TT^* - TT_N \| \leq \| T \| \| T^* - T_N \| \longrightarrow 0 \ (N \longrightarrow +\infty) \tag{3}$$

と

$$\| T^*T - T_N T \| \leq \| T^* - T_N \| \| T \| \longrightarrow 0 \ (N \longrightarrow +\infty) \tag{4}$$

が成り立つ．(3) により

$$TT^* = \lim_{N \to \infty} TT_N = \lim_{N \to \infty} \sum_{n=1}^{N+1} T^n = \sum_{n=1}^{+\infty} T^n = T^* - I$$

が成り立つから $I = T^* - TT^* = (I - T)T^*$ と表現でき，また (4) により

$$T^*T = \lim_{N \to \infty} T_N T = \lim_{N \to \infty} \sum_{n=1}^{N+1} T^n = \sum_{n=1}^{+\infty} T^n = T^* - I$$

も成り立つから $I = T^* - T^*T = T^*(I - T)$ と表現できる．ゆえに $I = (I - T)T^* = T^*(I - T)$ が成り立ち，この等式は $I - T$ が $X \longmapsto X$ の全単射であり $T^* \in B(X)$ を逆写像にもつことを示している． ∎

[9]. $(S, \mathfrak{M}, \mu)$ は $\sigma-$ 有限な測度空間，$X = \mathrm{L}^2(S, \mathfrak{M}, \mu) = \mathrm{L}^2(\mu)$ とする．可測関数 $a : S \to \mathbb{C}$ に対して，X 上の掛け算作用素 M_a を次で定める：

$$D(M_a) = \{u \in X \,|\, au \in X\}, \quad (M_a u)(x) = a(x)u(x) \ (x \in S).$$

(1) $D(M_a)$ が X で稠密であることを示せ．

(2) $a \in \mathrm{L}^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ ならば $M_a \in B(X)$ であり，$\| M_a \| = \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$ が成り立つことを示せ.

(3) 逆に $M_a \in B(X)$ ならば $a \in \mathrm{L}^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ であることを示せ.

証明.

(1) 任意の $v \in X$ に対して $v_n \coloneqq v I_{(|a| \le n)}$ $(n = 1, 2, 3, \cdots)$ として関数列 $(v_n)_{n=1}^\infty$ を作る．$I_{(|a| \le n)}$ は定義関数で $|a(x)| \le n$ となる $x \in S$ の上で 1，その外では 0 となる．全ての $x \in S$ で $|v_n(x)| \le |v(x)|$ となるから $(v_n)_{n \in \mathbb{N}} \subset X$ である．さらに $(v_n)_{n \in \mathbb{N}} \subset D(M_a)$ でもあることが示される．全ての $n \in \mathbb{N}$ について

$$\int_S |a(x) v_n(x)|^2 \mu(dx) = \int_{(|a| \le n)} |a(x) v(x)|^2 \mu(dx) \le n^2 \int_S |v(x)|^2 \mu(dx)$$

が成り立つからである．X のノルムを $\| \cdot \|_{\mathrm{L}^2(\mu)}$ で表せば

$$\| v - v_n \|_{\mathrm{L}^2(\mu)}^2 = \int_S |v(x) - v_n(x)|^2 \, \mu(dx) = \int_S I_{(|a| > n)}(x) |v(x)|^2 \, \mu(dx) \tag{5}$$

が成り立つ．a は $\mathbb{C}$ 値であるから，各点 $x \in S$ で $\lim_{n \to +\infty} I_{(|a| > n)}(x) = 0$ が成り立つ．式 (5) の右辺の被積分関数は n に関係なく可積分関数 $|v|^2$ で抑えられ各点で $n \to +\infty$ で 0 に収束するから，Lebesgue の収束定理を適用すれば

$$\lim_{n \to +\infty} \| v - v_n \|_{\mathrm{L}^2(\mu)}^2 = \lim_{n \to +\infty} \int_S I_{(|a| > n)}(x) |v(x)|^2 \, \mu(dx) = \int_S \lim_{n \to +\infty} I_{(|a| > n)}(x) |v(x)|^2 \, \mu(dx) = 0$$

が成立する．これは $X = \left(X, \| \cdot \|_{\mathrm{L}^2(\mu)} \right)$ において v の任意の近傍に $D(M_a)$ の元 v_n が存在することを表していて，v は任意に選んでいたから $D(M_a)$ は X で稠密であると示された.

(2) $a \in \mathrm{L}^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ ならば，$\| \cdot \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$ の定義より

$$\| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} = \inf \{ b \in [0, +\infty) \mid \mu(x \in S \mid |a(x)| > b) = 0 \} < +\infty$$

である．特に

$$N_m \coloneqq \left\{ x \in S \;\middle|\; |a(x)| \ge \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} + \frac{1}{m} \right\}, \quad (m = 1, 2, 3, \cdots)$$

と置けば $\mu(N_m) = 0$ $(m = 1, 2, 3, \cdots)$ であって，μ 零集合 N を

$$N \coloneqq \bigcup_{m=1}^\infty N_m$$

で定めれば

$$|a(x)| \le \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}, \quad (\forall x \in S \cap N^c) \tag{6}$$

が成り立つ．また $0 < c < \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$ となるような任意の c については

$$\mu(\{ x \in S \mid |a(x)| > c \}) > 0 \tag{7}$$

が成り立つことにも注意しておく．全ての $u \in X$ に対して，(6) により

$$\begin{aligned}
\| M_a u \|^2_{\mathrm{L}^2(\mu)} &= \int_S |a(x)u(x)|^2 \, \mu(dx) \\
&= \int_{S/N} |a(x)u(x)|^2 \, \mu(dx) \\
&\leq \int_{S/N} \| a \|^2_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} |u(x)|^2 \, \mu(dx) \\
&= \int_S \| a \|^2_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} |u(x)|^2 \, \mu(dx) = \| a \|^2_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} \| u \|_{\mathrm{L}^2(\mu)}
\end{aligned}$$

が成り立っていることから，$\| M_a \| \leq \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$ であり $M_a \in B(X)$ が示される．さらに，$(S, \mathfrak{M}, \mu)$ が $\sigma-$ 有限な測度空間であるという条件の下では，$\| M_a \| = \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$ であることが次のように示される．$\| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} = 0$ ならば明らかに M_a は零作用素で $0 = \| M_a \| = \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$ である．$\| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} > 0$ である場合，$\| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} >> \epsilon > 0$ を満たすような ϵ を任意に取り，

$$G_\epsilon := \left\{ x \in S \cap N^c \;\middle|\; \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} - \epsilon < |a(x)| \right\}$$

として μ 可測集合 G_ϵ を作る．(7) により，$\mu(G_\epsilon) > 0$ であることが次で示される．

$$\begin{aligned}
\mu(G_\epsilon) &= \mu\left(\left\{ x \in S \;\middle|\; \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} - \epsilon < |a(x)| \right\} \cap N^c \right) \\
&= \mu\left(\left\{ x \in S \;\middle|\; \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} - \epsilon < |a(x)| \right\} \right) && (\because \mu(N) = 0) \\
&> 0. && (\because (7)).
\end{aligned}$$

$\sigma-$ 有限の仮定より，単調増大な μ 可測集合列 $S_1 \subset S_2 \subset S_3 \subset \cdots$ で $\mu(S_k) < +\infty$ $(k = 1, 2, 3, \cdots)$ と $\cup_{k=1}^\infty S_k = S$ を満たすものが存在して

$$0 < \mu(G_\epsilon) = \lim_{k \to \infty} \mu(S_k \cap G_\epsilon)$$

となるから，必ず或る S_k に対して

$$r_\epsilon := \mu(S_k \cap G_\epsilon) > 0$$

となっている．

$$u_\epsilon(x) := \begin{cases} 1/\sqrt{r_\epsilon} & x \in S_k \cap G_\epsilon \\ 0 & x \notin S_k \cap G_\epsilon \end{cases}$$

と定義すれば，$\mu(S_k \cap G_\epsilon) < +\infty$ であるから $u_\epsilon \in X$ であって

$$\| u_\epsilon \|_{\mathrm{L}^2(\mu)} = 1$$

となっている．この u_ϵ に対して

$$\left(\| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} - \epsilon \right)^2 < \int_{S_k \cap G_\epsilon} |a(x) u_\epsilon(x)|^2 \, \mu(dx) = \int_S |a(x) u_\epsilon(x)|^2 \, \mu(dx) \leq \| a \|^2_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$$

により

$$\| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} - \epsilon < \| M_a u_\epsilon \|_{\mathrm{L}^2(\mu)} \leq \| a \|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$$

が成り立っているから

$$\|a\|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} - \epsilon < \sup_{0\neq u\in X} \frac{\|M_a u\|_{\mathrm{L}^2(\mu)}}{\|u\|_{\mathrm{L}^2(\mu)}} = \|M_a\| \leq \|a\|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)}$$

である．$\epsilon > 0$ は任意に取っていたから，$\epsilon \to 0$ で考えれば

$$\|a\|_{\mathrm{L}^\infty(\mu)} = \|M_a\|$$

が示されたことになる．

(3) $M_a \in B(X)$ ならば

$$\int_S |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) = \|M_a u\|^2_{\mathrm{L}^2(\mu)} \leq \|M_a\|^2 \|u\|^2_{\mathrm{L}^2(\mu)} = \|M_a\|^2 \int_S |u(x)|^2 \mu(dx)$$

が成立している．$(S, \mathfrak{M}, \mu)$ が $\sigma-$ 有限な測度空間であるという条件の下では

$$\mu(\{x \in S \mid |a(x)| > \|M_a\|\}) = 0$$

が成り立つことを示す．これが示されれば $a \in \mathrm{L}^\infty(S, \mathfrak{M}, \mu)$ が従う．$\sigma-$ 有限の仮定より，単調増大な μ 可測集合列 $S_1 \subset S_2 \subset S_3 \subset \cdots$ で $\mu(S_k) < +\infty$ $(k = 1, 2, 3, \cdots)$ と $\cup_{k=1}^\infty S_k = S$ を満たすものが存在する．μ 可測集合

$$G := \{x \in S \mid |a(x)| > \|M_a\|\}$$

について，これが仮に $\mu(G) > 0$ であるとすると

$$0 < \mu(G) = \lim_{k\to\infty} \mu(S_k \cap G)$$

により或る $K \in \mathbb{N}$ が存在して $\mu(S_k \cap G) > 0$ $(\forall k > K)$ が成立する．$k > K$ を満たす k を選んで

$$u(x) = \begin{cases} 1 & x \in S_k \cap G \\ 0 & x \notin S_k \cap G \end{cases}$$

と置けば，$\mu(S_k \cap G) < +\infty$ であることから $u \in X$ であって，

$$\|u\|^2_{\mathrm{L}^2(\mu)} = \int_S |u(x)|^2 \mu(dx) = \mu(S_k \cap G)$$

が成り立っている．G 上で $|a(x)| > \|M_a\|$ であるから

$$\begin{aligned} \|M_a\|^2 \|u\|^2_{\mathrm{L}^2(\mu)} &= \|M_a\|^2 \int_S |u(x)|^2 \mu(dx) \\ &= \|M_a\|^2 \int_{S_k \cap G} |u(x)|^2 \mu(dx) \\ &< \int_{S_k \cap G} |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) \\ &\leq \int_S |a(x)u(x)|^2 \mu(dx) \\ &\leq \|M_a\|^2 \|u\|^2_{\mathrm{L}^2(\mu)} \end{aligned}$$

となるが，最右辺と最左辺を $\|u\|^2_{\mathrm{L}^2(\mu)}$ で割ると

$$\|M_a\| < \|M_a\|$$

と矛盾が出る．従って $\mu(G) = 0$ でなくてはならない． ∎

[10]. X をノルム空間，X_0 をその部分空間とする．$i : X_0 \to X$ を $i(x) = x\ (x \in X_0)$ なる包含写像とする．$T : X^* \ni x^* \longmapsto x^* \circ i \in X_0^*$ により線型写像を定める．

(1) T は連続かつ全射であることを示せ.

(2) X_0 が X で稠密ならば，T はノルム空間としての同型写像であることを示せ.

(3) X_0 が X で稠密でないならば，T は単射でないことを示せ.

証明. (1) 任意の $x^* \in X^*$ と $u \in X_0$ に対して

$$|(x^* \circ i)(u)| = |x^*(u)| \leq \|x^*\|_{X^*} \|u\|_X$$

が成り立つから $\|x^* \circ i\|_{X_0^*} \leq \|x^*\|_{X^*}\ (\forall x^* \in X^*)$ が成立する．従って

$$\|Tx^*\|_{X_0^*} = \|x^* \circ i\|_{X_0^*} \leq \|x^*\|_{X^*} \quad \forall x^* \in X^*$$

となり T が有界作用素であることが示される．T が全射であることは Hahn-Banach の定理による．任意の $f_0 \in X_0^*$ に対して X 上のセミノルムとして $X \ni x \longmapsto \|f_0\|_{X_0^*} \|x\|_X \in \mathbb{C}$ を考えれば作用素ノルムの定義より

$$|f_0(x)| \leq \|f_0\|_{X_0^*} \|x\|_X \quad (\forall x \in X_0)$$

が成り立っているから，Hahn-Banach の定理が適用されて X 上の線型汎関数 $f \in X^*$ で

$$\begin{cases} |f(x)| \leq \|f_0\|_{X_0^*} \|x\|_X & (\forall x \in X), \\ f(x) = f_0(x) & (\forall x \in X_0) \end{cases}$$

を満たすものが存在する．明らかに $f \circ i = f_0$ が成り立っているから T が全射であることが示された.

(2) X_0 が X で稠密であるなら，任意の $f_0 \in X_0^*$ はノルムを変えることなく $f \in X^*$ に一意に拡張されるということが示される．まずはこのことを証明する．これが示されれば，(1) の結果と合わせて

- $T : X \longmapsto X_0$ は線型全単射である.
- $\|Tx^*\|_{X_0^*} = \|x^* \circ i\|_{X_0^*} = \|x^*\|_{X^*}$

が成り立つことが示され，T がノルム空間としての同型写像であると判る．X_0 が X で稠密であるということにより，任意の $x \in X$ に対して $x_k \in X_0\ (k = 1, 2, \cdots)$ で $\|x_k - x\|_X \longrightarrow 0\ (k \longrightarrow +\infty)$ となるものを取れる．任意に $f_0 \in X_0^*$ を取れば，任意の $m, n \in \mathbb{N}$ に対して

$$|f_0(x_m) - f_0(x_n)| \leq \|f_0\|_{X_0^*} \|x_m - x_n\|_X$$

が成り立つから，右辺が X_0 の Cauchy 列をなすことにより $(f_0(x_n))_{n=1}^{+\infty}$ も $\mathbb{C}$ の Cauchy 列となる．$\mathbb{C}$ の完備性から $(f_0(x_n))_{n=1}^{+\infty}$ は或る $u \in \mathbb{C}$ に収束する．この u は $x \in X$ に対して一意に定まる．なぜならば，x への別の収束列 $y_k \in X_0\ (k = 1, 2, \cdots)$ を取った場合，$(f_0(y_n))_{n=1}^{+\infty}$ の収束先が $v \in \mathbb{C}$ であるとして，任意の $n, m \in \mathbb{N}$ に対して

$$\begin{aligned} |u - v| &= |u - f_0(x_n) + f_0(x_n) - f_0(y_m) + f_0(y_m) - v| \\ &\leq |u - f_0(x_n)| + |f_0(x_n) - f_0(y_m)| + |f_0(y_m) - v| \\ &\leq |u - f_0(x_n)| + \|f_0\|_{X_0^*} \|x_n - y_m\|_X + |f_0(y_m) - v| \\ &\leq |u - f_0(x_n)| + \|f_0\|_{X_0^*} (\|x_n - x\|_X + \|x - y_m\|_X) + |f_0(y_m) - v| \end{aligned}$$

となるから $n, m \longrightarrow +\infty$ で右辺は 0 に収束し，$u = v$ が示されるためである．x に u を対応させる関係は $X \longmapsto \mathbb{C}$ の写像となり，この写像を f と表すことにする．f の線型性も次のように示される．任意の $x,\ y \in X,\ \alpha,\ \beta \in \mathbb{C}$ に対して，x, y への収束列 $(x_k)_{k=1}^{+\infty},\ (y_k)_{k=1}^{+\infty} \subset X_0$ を取れば $(\alpha x_k + \beta y_k)_{k=1}^{+\infty}$ が $\alpha x + \beta y$ への収束列となるから

$$
\begin{aligned}
|f(\alpha x + \beta y) - \alpha f(x) - \beta f(y)| &= |f(\alpha x + \beta y) - f_0(\alpha x_k + \beta y_k) + f_0(\alpha x_k) + f_0(\beta y_k) - \alpha f(x) - \beta f(y)| \\
&\leq |f(\alpha x + \beta y) - f_0(\alpha x_k + \beta y_k)| + |\alpha f_0(x_k) - \alpha f(x)| + |\beta f_0(y_k) - \beta f(y)| \\
&\leq |f(\alpha x + \beta y) - f_0(\alpha x_k + \beta y_k)| + |\alpha||f_0(x_k) - f(x)| + |\beta||f_0(y_k) - f(y)| \\
&\longrightarrow 0 \quad (k \longrightarrow +\infty)
\end{aligned}
$$

が成り立つ．ゆえに $f(\alpha x + \beta y) = \alpha f(x) + \beta f(y)\ (\forall x,\ y \in X,\ \alpha,\ \beta \in \mathbb{C})$ である．また f は有界な線型作用素である．なぜなら，任意に $x \in X$ と x への収束列 $x_k \in X_0\ (k = 1, 2, \cdots)$ を取れば任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $K \in \mathbb{N}$ が存在して全ての $k > K$ について

$$
|f(x)| < |f_0(x_k)| + \epsilon, \quad \| x \|_X < \| x_k \|_X + \epsilon / \| f_0 \|_{X_0^*}
$$

が成り立つようにできるから，この下で

$$
|f(x)| < |f_0(x)| + \epsilon \leq \| f_0 \|_{X_0^*} \| x \|_X + 2\epsilon
$$

となり $f \in X^*$ であることと $\| f \|_{X^*} \leq \| f_0 \|_{X_0^*}$ が判るからである．さらに作用素ノルムの性質より

$$
\| f \|_{X^*} = \sup_{\substack{x \in X \\ \| x \|_X = 1}} |f(x)| \geq \sup_{\substack{x \in X_0 \\ \| x \|_X = 1}} |f(x)| = \sup_{\substack{x \in X_0 \\ \| x \|_X = 1}} |f_0(x)| = \| f_0 \|_{X_0^*}
$$

も成り立つから結局 $\| f \|_{X^*} = \| f_0 \|_{X_0^*}$ であると判る．以上より任意の $f_0 \in X_0^*$ がノルムを変えないまま或る $f \in X^*$ に拡張されることが示された．拡張の一意性について，f_0 の X^* への別の拡張 g が存在したとする．つまり g は X 上の有界な線型汎関数で x_0 の上では f_0 と一致するものである．g が f に X 上で完全に一致することを示すには f と g が $X \backslash X_0$ で一致することを見ればよい．任意の $x \in X \backslash X_0$ に対して $x_k \in X_0\ (k = 1, 2, \cdots)$ で $x_k \longrightarrow x\ (k \longrightarrow +\infty)$ となるものを取れば

$$
\begin{aligned}
|f(x) - g(x)| &= |f(x) - f(x_k) + g(x_k) - g(x)| \\
&\leq |f(x) - f(x_k)| + |g(x_k) - g(x)| \\
&\leq \| f \|_{X^*} \| x_k - x \|_X + \| g \|_{X^*} \| x_k - x \|_X \\
&\longrightarrow 0 \quad (k \longrightarrow +\infty)
\end{aligned}
$$

が成り立つから $f(x) = g(x)\ (\forall x \in X \backslash X_0)$，すなわち $f(x) = g(x)\ (\forall x \in X)$ が成り立つと示された．任意の $x^* \in X^*$ は $x^* \circ i$ を X^* の元に拡張したものであるから，つまり $x^*,\ y^* \in X^*$ に対して X_0 上で $x^* \circ i = y^* \circ i$ が成り立っているならば拡張の一意性により X 上で $x^* = y^*$ が成り立つから T は単射である．(全射であることは (1) で示した．) またノルムを変えない拡張であるから $\| T x^* \|_{X_0^*} = \| x^* \circ i \|_{X_0^*} = \| x^* \|_{X^*}$ の意味で T は等長で，以上で T が $X^* \longrightarrow X_0^*$ の線形全単射，すなわち同型写像であることが示された．

(3) X_0 が X で稠密でない場合，X_0 の $\|\cdot\|_X$ による閉包を $[X_0]^a$ と表せば $X\setminus[X_0]^a \neq \emptyset$ である．任意の $x^*,\ y^* \in X^*$ に対して定義域を $[X_0]^a$ に制限したものを $x^*|_{[X_0]^a},\ y^*|_{[X_0]^a}$ と表わせばこれは $[X_0]^a$ 上の有界な線型汎関数であり，もちろん $x^*|_{[X_0]^a} \circ i = x^* \circ i$ かつ $y^*|_{[X_0]^a} \circ i = y^* \circ i$ である．従って (2) の結果により

$$x^* \circ i = y^* \circ i \quad \Leftrightarrow \quad x^*|_{[X_0]^a} = y^*|_{[X_0]^a}$$

が成り立つ．つまり $X\setminus[X_0]^a$ の上での $x^*,\ y^*$ の値に関係なく，X_0 の上で一致するための必要十分条件は $[X_0]^a$ の上で一致していることである．$x^* \in X^*$ を任意にとって (零写像でないものを取る)2 つの写像 $x_1^*,\ x_2^*$ を

$$x_1^*(x) = \begin{cases} x_1(x) & (x \in [X_0]^a) \\ \|x^*\|_{X^*}\, x & (x \in X\setminus[X_0]^a) \end{cases}, \quad x_2^*(x) = \begin{cases} x_1(x) & (x \in [X_0]^a) \\ -\|x^*\|_{X^*}\, x & (x \in X\setminus[X_0]^a) \end{cases}$$

と定義すれば，X_0 が部分空間であるから $\emptyset \neq X\setminus[X_0]^a$ かつ $0 \notin X\setminus[X_0]^a$ により $x_1^* \neq x_2^*$ が成り立っている．

[11].

(1) c_0 は l^∞ の閉線形部分空間であることを示せ．

(2) l^∞ と c_0 が可分であるかどうか判定せよ．

証明.

(1) まず $c_0 \subset l^\infty$ であることを示す．$\forall a = (a_n)_{n=1}^\infty \in c_0$ は収束点列である．任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ を取れば，N 以降の $n \in \mathbb{N}$ については $|a_n| < \epsilon$ で抑えられるから

$$\sup_{n\in\mathbb{N}} |a_n| \leq \max\{|a_1|,\ |a_2|,\ \cdots,\ |a_N|,\ \epsilon\} < +\infty$$

が成り立ち $a \in l^\infty$ が判る．従って $c_0 \subset l^\infty$ である．つぎに c_0 が線型空間 l^∞ の線形部分空間であることを示す．任意の $a = (a_n)_{n=1}^\infty,\ b = (b_n)_{n=1}^\infty \in c_0,\ \alpha \in \mathbb{C}$ に対し

$$\begin{aligned} &|a_n + b_n| \leq |a_n| + |b_n| \longrightarrow 0 \quad (n \longrightarrow +\infty), \\ &|\alpha a_n| = |\alpha||a_n| \longrightarrow 0 \quad (n \longrightarrow +\infty) \end{aligned}$$

が成り立つことにより $a + b \in c_0$ と $\alpha a \in c_0$ が示される．従って c_0 は l^∞ の線形部分空間である．最後に c_0 が l^∞ で閉集合となっていることを示す．l^∞ は $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして Banach 空間となっているから，その部分空間である c_0 が $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして Banach 空間をなしていることを示せばよい．$a^{(n)} = \left(a_m^{(n)}\right)_{m=1}^\infty \in c_0\ (m = 1, 2, 3, \cdots)$ を $\|\cdot\|_{l^\infty}$ に関する Cauchy 列とする．$(l^\infty,\ \|\cdot\|_{l^\infty})$ が完備であるから，$\left(a^{(n)}\right)_{n=1}^\infty$ は或る $a^* = (a_m^*)_{m=1}^\infty \in l^\infty$ に m に関して一様に収束している．つまり任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ が存在して，全ての $n > N$ について

$$\left\| a^{(n)} - a^* \right\|_{l^\infty} = \sup_{m\in\mathbb{N}} \left| a_m^{(n)} - a_m^* \right| < \epsilon \tag{8}$$

が成り立っている．$a^* = (a_m^*)_{m=1}^\infty$ が c_0 の元であることは帰謬法で示す．$a^* \notin c_0$ であると仮定すると，或る $\delta > 0$ に対しては，いかなる $N \in \mathbb{N}$ を取っても必ず $n > N$ なる自然数で

$$|a_n^*| \geq \delta$$

を満たすものが存在する．$(a_m^*)_{m=1}^{\infty}$ の部分列 $(a_{m_k}^*)_{k=1}^{\infty}$ を

$$|a_{m_k}^*| \geq \delta, \qquad (m_k < m_{k+1},\ k = 1, 2, 3, \cdots)$$

を満たすものとして取ることが出来て，(8) により或る $N_\delta \in \mathbb{N}$ を取れば，全ての $n > N_\delta$ で

$$\sup_{k \in \mathbb{N}} \left| a_{m_k}^{(n)} - a_{m_k}^* \right| < \frac{\delta}{2}$$

が成立することになる．$n > N_\delta$ 番目の数列 $a^{(n)} = \left(a_m^{(n)}\right)_{m=1}^{\infty}$ は c_0 の元であるから，或る $N_\delta^n \in \mathbb{N}$ が存在して全ての $p > N_\delta^n$ に対し

$$\left| a_p^{(n)} \right| < \frac{\delta}{2}$$

となるはずであるが，$m_1 < m_2 < m_3 < \cdots \to +\infty$ であるから $m_k > N_\delta^n$ となるような添数 m_k が存在してしまい，

$$\frac{\delta}{2} \leq \left| a_{m_k}^* \right| - \frac{\delta}{2} < \left| a_{m_k}^{(n)} \right| < \frac{\delta}{2}$$

と矛盾が出る．従って $a^* \in c_0$ であるべきで，これは c_0 が $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして完備であることを示したことになる．ゆえに c_0 は l^∞ の閉線形部分空間である．

(2) 結論は，l^∞ は可分ではなく c_0 は可分である．順番に示す．l^∞ の部分集合として 0 と 1 のみで成る数列全体

$$M := \left\{ a \in l^\infty \ \middle|\ a = (a_n)_{n=1}^{+\infty},\ a_n \in \{0, 1\},\ n = 1, 2, 3, \cdots \right\}$$

を考える．また任意の $a = (a_n)_{n=1}^{\infty}$, $b = (b_n)_{n=1}^{\infty} \in M$ に対し

$$\| a - b \|_{l^\infty} = \sup_{n \in \mathbb{N}} |a_n - b_n| = \begin{cases} 1 & (a = b) \\ 0 & (a \neq b) \end{cases}$$

が成り立つから，M の異なる 2 元の $\|\cdot\|_{l^\infty}$ による距離は 1 で固定されている．もし l^∞ が可分であるとすれば，$\|\cdot\|_{l^\infty}$ に関して l^∞ で稠密な可算部分集合 C が存在することになる．任意の $a \in M$ に対してその 1/2 近傍 (sup-norm) の内部に C の元が存在していることになるから，そのうちの一つを c_a と表し対応を付ける．$a \in M$ に対応する $c_a \in C$ は他の M の元の 1/2 近傍に属することはない．もし c_a が或る $a \neq b \in M$ の 1/2 近傍に入ると

$$1 = \| a - b \|_{l^\infty} \leq \| a - c_a \|_{l^\infty} + \| b - c_a \|_{l^\infty} < \frac{1}{2} + \frac{1}{2} = 1$$

と矛盾ができるからである．即ち M から C への対応関係 $M \ni a \longmapsto c_a \in C$ は単射である．ここで M の濃度 $2^{\mathbb{N}}$ が連続体濃度であることに注意すれば，単射の存在により C の濃度は連続体濃度以上で C が可算集合であることに反する．従って l^∞ は可分ではない．一方で c_0 は $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして可分なノルム空間をなす．c_0 の可算部分集合を

$$S := \left\{ b \in c_0 \ \middle|\ b = (\alpha_n + i\beta_n)_{n=1}^{+\infty},\ \begin{cases} \alpha_n,\ \beta_n \in \mathbb{Q}, & n = 1, 2, \cdots, N, \\ \alpha_n = \beta_n = 0, & n \geq N + 1, \end{cases} \ (N = 1, 2, 3, \cdots) \right\}$$

として取る．ただし i は $i^2 = -1$ なる虚数単位で $\mathbb{Q}$ は有理数全体である．任意の $a = (a_n)_{n=1}^{+\infty} \in c_0$ について，任意の正数 $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ を取れば全ての $n > N$ で

$$|a_n| < \epsilon$$

が成り立つから，後は $(a_n)_{n=1}^N$ の部分で

$$\sup_{n=1,2,\cdots,N} |a_n - b_n| < \epsilon$$

となるように S の元 $b = (b_n)_{n=1}^{+\infty}$ $(b_n = 0,\ n > N)$ を取れば

$$\|a - b\|_{l^\infty} < \epsilon$$

が成り立つ．即ち S が c_0 において $\|\cdot\|_{l^\infty}$ に関して稠密であるとわかり，c_0 が可分であると示された． ∎

[12]. $a = (a_n)_{n=1}^\infty \in l^1$ に対して $T_a : c_0 \longmapsto \mathbb{C}$ を次で定める:

$$T_a(x) = \sum_{n=1}^\infty a_n x_n \ (x = (x_n) \in c_0).$$

(1) $\forall a = (a_n) \in l^1$, $T_a \in c_o^*$ かつ $\|T_a\| = \|a\|_{l^1}$ であることを示せ．

(2) $T : l^1 \ni a \longmapsto T_a \in c_0^*$ は Banach 空間としての同系写像であることを示せ．

証明.

(1) 設問 [11] の結果により，T_a の定義域である c_0 は $\|\cdot\|_{l^\infty}$ をノルムとして l^∞ の閉線型部分空間であり，よって Banach 空間である．このことに留意して以下進む．$a = (a_n)_{n=1}^\infty \in l^1$ を任意に取って固定する．任意の $x = (x_n) \in c_0$ に対して

$$\sum_{n=1}^\infty |a_n||x_n| \leq \sum_{n=1}^\infty |a_n| \|x\|_{l^\infty} = \|a\|_{l^1} \|x\|_{l^\infty} < +\infty \tag{9}$$

となり級数 $T_a(x)$ $(\forall x \in c_0)$ は有限確定するから，任意の $x = (x_n), y = (y_n) \in c_0$, $\alpha \in \mathbb{C}$ に対して以下に示す式変形が正当化される．

$$\sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n + a_n y_n = \sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n + \sum_{n=1}^{+\infty} a_n y_n, \quad \sum_{n=1}^{+\infty} \alpha a_n x_n = \alpha \sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n, \quad \left|\sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n\right| \leq \sum_{n=1}^{+\infty} |a_n||x_n|.$$

従って任意に $x = (x_n), y = (y_n) \in c_0$ と $\alpha \in \mathbb{C}$ を取れば．

$$T_a(x+y) = \sum_{n=1}^\infty a_n(x_n + y_n) = \sum_{n=1}^\infty (a_n x_n + a_n y_n) = \sum_{n=1}^\infty a_n x_n + \sum_{n=1}^\infty a_n y_n = T_a x + T_a y,$$

$$T_a(\alpha x) = \sum_{n=1}^\infty a_n(\alpha x_n) = \sum_{n=1}^\infty (a_n \alpha) x_n = \sum_{n=1}^\infty (\alpha a_n) x_n = \sum_{n=1}^\infty \alpha(a_n x_n) = \alpha \sum_{n=1}^\infty a_n x_n = \alpha T_a(x)$$

により T_a の線型性が示されるから，T_a は $c_0 \to \mathbb{C}$ の線型汎関数である．有界性は式 (9) により

$$|T_a(x)| \leq \|a\|_{l^1} \|x\|_{l^\infty}$$

から $\|T_a\| \leq \|a\|_{l^1}$ となるとわかる．ゆえに $T_a \in c_0^*$ $(\forall a \in l^1)$ である．また $\|T_a\| = \|a\|_{l^1}$ について，$a = 0$ の場合は T_a が零作用素になるから明らかに成り立つ．$a \neq 0$ の場合，任意の $\|a\|_{l^1} >> \epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ が存在して

$$\|a\|_{l^1} - \epsilon < \sum_{n=1}^N |a_n|$$

とできる．$x \in c_0$ を

$$x_n = \begin{cases} \overline{a_n}/|a_n| & a_n \neq 0, \text{and n} \leq \text{N} \\ 0 & a_n = 0, \text{or n} > \text{N} \end{cases}$$

となっているもので取れば,

$$\| a \|_{l^1} - \epsilon < \sum_{n=1}^{N} |a_n| = \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n = T_a(x) = |T_a(x)|$$

が成立することになる．$\| x \|_{l^\infty} = 1$ であることに注意すれば

$$\| a \|_{l^1} - \epsilon < T_a(x) = \frac{|T_a(x)|}{\| x \|_{l^\infty}} \leq \sup_{0 \neq y \in c_0} \frac{|T_a(y)|}{\| y \|_{l^\infty}} = \| T_a \| \leq \| a \|_{l^1}$$

が成り立ち，ϵ が任意であるから，$a = 0$ の場合と合わせて $\| T_a \| = \| a \|_{l^1}$ $(\forall a \in l^1)$ が示された．

(2) まず，l^1 は $\| \cdot \|_{l^1}$ をノルムとして Banach 空間となり，c_0^* は T_a の値域 $\mathbb{C}$ が Banach 空間であるから作用素ノルムにより Banach 空間となっている．写像 T が

$$\| T a \| = \| T_a \| = \| a \|_{l^1} \quad (\forall a \in l^1)$$

の意味で等長であることは (1) で示してあるから，後は T が線型全単射であることを証明すればよい．任意の $a = (a_n), b = (b_n) \in l^1$, $\alpha \in \mathbb{C}$ に対して

$$\sum_{n=1}^{\infty} (a_n + b_n) x_n = \sum_{n=1}^{\infty} (a_n x_n + b_n x_n) = \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n + \sum_{n=1}^{\infty} b_n x_n,$$
$$\sum_{n=1}^{\infty} (\alpha a_n) x_n = \sum_{n=1}^{\infty} \alpha (a_n x_n) = \alpha \sum_{n=1}^{\infty} a_n x_n$$

が成り立つから

$$T(a + b) = T_{a+b} = T_a + T_b = Ta + Tb$$
$$T(\alpha a) = T_{\alpha a} = \alpha T_a = \alpha T a$$

も成り立つことにより T の線型性が示される．また $a = (a_n), b = (b_n) \in l^1$ に対して，$a \neq b$ であるなら或る $N \in \mathbb{N}$ 番目で $a_N \neq b_N$ となっているはずであるから,

$$x_N = \begin{cases} 1 & n = N \\ 0 & n \neq N \end{cases}$$

となる $x = (x_n) \in c_0$ に対して

$$T_a(x) = a_N \neq b_N = T_b(x)$$

となり，T が単射であることが示される．最後に T が全射であることを示す．任意に $L \in c_0^*$ を取る．或る $a \in l^1$ に対して L が T_a に一致することを見ればよい．Kronecker のデルタを用いて

$$e_n \coloneqq (\delta_{jn})_{j=1}^{\infty}$$

で表現される e_n $(n = 1, 2, 3, \cdots)$ は c_0 の元であり，各 $n = 1, 2, 3, \cdots$ に対して

$$a_n \coloneqq L(e_n) \tag{10}$$

とおく．任意の $x = (x_n) \in c_0$ に対して

$$x^{(N)} = \sum_{n=1}^{N} x_n e_n, \quad (N = 1, 2, 3, \cdots)$$

として作られる数列の族 $\left(x^{(N)}\right)_{N=1}^{\infty}$ は l^∞ において収束し，$x^{(N)} \to x$ $(N \to +\infty)$ が成り立つ．これは $x = (x_n)$ が収束数列であることによる．任意の $\epsilon > 0$ に対して或る $N \in \mathbb{N}$ を選べば

$$|x_n| < \epsilon, \quad (\forall n > N)$$

が成り立つから，$n > N$ なる任意の自然数 n に対して

$$\left\| x - x^{(n)} \right\|_{l^\infty} = \sup_{m>n} |x_m| < \epsilon$$

となり，$x^{(N)} \to x$ $(N \to +\infty)$ が示されるのである．L が有界線型汎関数であることも併せれば

$$\left| L(x) - L(x^{(N)}) \right| \leq \| L \| \left\| x - x^{(N)} \right\|_{l^\infty} \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow +\infty)$$

により

$$L(x) = \lim_{N \to +\infty} L(x^{(N)}) = \lim_{N \to +\infty} \sum_{n=1}^{N} L(x_n e_n) = \lim_{N \to +\infty} \sum_{n=1}^{N} a_n x_n = \sum_{n=1}^{+\infty} a_n x_n \quad (\forall x \in c_0)$$

が成り立つ．後は (10) で定義した複素数列 $(a_n)_{n=1}^{\infty}$ が l^1 に属していることを示せば，写像 $L : c_0 \longmapsto \mathbb{C}$ が $T_a : c_0 \longmapsto \mathbb{C}$ に一致していると証明される．これは次のように示される．$a_n \neq 0$ $(\exists n \leq M)$ となるような $M \in \mathbb{N}$ を取って，この M に対して $x = (x_n) \in c_0$ として

$$x_n = \begin{cases} \overline{a_n}/|a_n| & a_n \neq 0, \text{and n} \leq \text{M} \\ 0 & a_n = 0, \text{or n} > \text{M} \end{cases}$$

となるものを取れば,

$$L(x) = \lim_{N \to +\infty} \sum_{n=1}^{N} a_n x_n = \sum_{n=1}^{M} |a_n|$$

が成り立つ．$\| x \|_{l^\infty} = 1$ であることに注意すれば

$$\sum_{n=1}^{M} |a_n| = L(x) = |L(x)| \leq \| L \| \| x \|_{l^\infty} = \| L \|$$

となる．M は任意に大きく取って問題ないから,

$$\sum_{n=1}^{M'} |a_n| \leq \| L \|, \quad (\forall M' \geq M)$$

が成り立ち，従って

$$\sum_{n=1}^{\infty} |a_n| \leq \| L \|$$

となることにより $a \in l^1$ であることが示された.

[13]. $1 < p < \infty$ とする．l^p の点列 $x(1), x(2), x(3), \cdots$ (ただし $x(j) = (x(j)_n)_{n=1}^{\infty}$) と $x = (x_n)_{n=1}^{\infty} \in l^p$ に対し，次の (i), (ii) が同値であることを示せ：

(1) w-$\lim_{n\to\infty} x(j) = x$.

(2) $\{x(j); j \in \mathbb{N}\}$ は有界でかつ $\forall n \in \mathbb{N}\ \lim_{j\to\infty} x(j)_n = x_n$.

証明.

l^p の共役空間　まず l^p の共役空間の任意の元 $f \in (l^p)^*$ が或る $v \in l^q$ に対応して

$$f(x) = \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n, \quad \left(x = (x_n)_{n=1}^{\infty} \in l^p,\ v = (v_n)_{n=1}^{\infty} \in l^q\right)$$

で表現されることを示す.

(1) ⇒ (2)　任意の $f \in (l^p)^*$ に対して，f には或る $v = (v_n)_{n=1}^{\infty} \in l^q$ が対応して

$$f(x(j)) = \sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n$$

と表すことができる．弱収束の仮定より任意の $\epsilon > 0$ に対してある $J \in \mathbb{N}$ が存在して，全ての $j > J$ で

$$|f(x(j)) - f(x)| < \epsilon$$

が成り立っている．$x(j), x \in l^p$, $v \in l^q$ であるから Hölder の不等式により

$$|f(x(j)) - f(x)| = \left|\sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n - \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n\right| = \left|\sum_{n=1}^{\infty} (x(j)_n - x_n)\, v_n\right| \leq \| x(j) - x \|_{l^p} \| v \|_{l^q}$$

と表現することができる.

(2) ⇒ (1)　$x(j)$ が有界であるから，或る正数 M が存在して

$$\sup_{j\in\mathbb{N}} \| x(j) \|_{l^p} \leq M$$

が成り立っている．即ち

$$\sup_{j,n\in\mathbb{N}} |x(j)_n| < +\infty$$

が成り立っていることになる．また $\forall n \in \mathbb{N}\ \lim_{j\to\infty} x(j)_n = x_n$ の意味は $n \in \mathbb{N}$ に関して $x(j)$ が x に各点収束しているということである．$f \in (l^p)^*$ を任意に取り，$f(x(j))$, $f(x)$ が $v = (v_n)_{n=1}^{\infty} \in l^q$ を用いて

$$f(x(j)) = \sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n, \quad f(x) = \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n$$

と表現できているとする．測度空間 $(\mathbb{N}, 2^{\mathbb{N}}, v)$ $(v(n) = v_n)$ における積分の収束を考えているとみなせば，以上の仮定により Lebesgue の優収束定理が適用できて

$$\lim_{j\to\infty} \sum_{n=1}^{\infty} x(j)_n v_n = \sum_{n=1}^{\infty} \lim_{j\to\infty} x(j)_n v_n = \sum_{n=1}^{\infty} x_n v_n$$

が成り立つ．これは $f(x(j)) \longrightarrow f(x)$ $(j \longrightarrow +\infty)$ を意味していて，線型汎関数 $f \in (l^p)^*$ は任意に取っているから w-$\lim_{n\to\infty} x(j) = x$ が示されたことになる.